

北京崇貞学園と桜美林学園の創立者・清水安三を語る

黒田芳嗣

【今泉】 本日の講師は清水安三記念プロジェクト委員の黒田芳嗣さんです。経歴を紹介しますと、黒田さんは当地のご出身で、豊橋東高校を出て東洋大で学ばれた後、編集企画会社 MAC に入社。日本大学の『日大広報』や日大人口研究所などで企画編集に携わります。仕事を通じ清水畏三先生と知り合い桜美林大学で『桜美林大学だより』を手がけるようになりました。退社後も桜美林学園の記念誌などの編集発行に携わり、そのようなことから、創立者・清水安三の記念プロジェクトに参加されています。本日は清水安三および北京崇貞学園についてお話していただきたいと思えます。では、お願いします。

【黒田】 ご紹介いただきました黒田です。よろしく申し上げます。

最初にお断りしておきますが、これらの写真は李紅衛さんと清水安三記念プロジェクトが収集したものを使わせていただいております。李さんの研究成果（2009年2月『清水安三と北京崇貞学園－近代における日中教育文化交流史の一断面－』と題し、不二出版から出版）を資料を含めて紹介する形でお話してまいります。

まず、写真を見ていただいて説明をしていきたいと思います。これらの写真は清水安三研究プロジェクトが集めた資料の中から選んだものです。

①この写真は安三先生が遠足で子ども達を引率している様子です。セーラー服姿の生徒達が写っていますが、当時の中国では珍しかったセーラー服



を着て修学旅行に行っていたといえます。

②これは当時の写真で、安三先生とともに崇貞学園をつくりあげた清水郁子先生が珍しくチマ・チョゴリ（朝鮮服）を着ている姿です。対面で同じように清水安三先生が朝鮮服を着た格好の写真がございます。



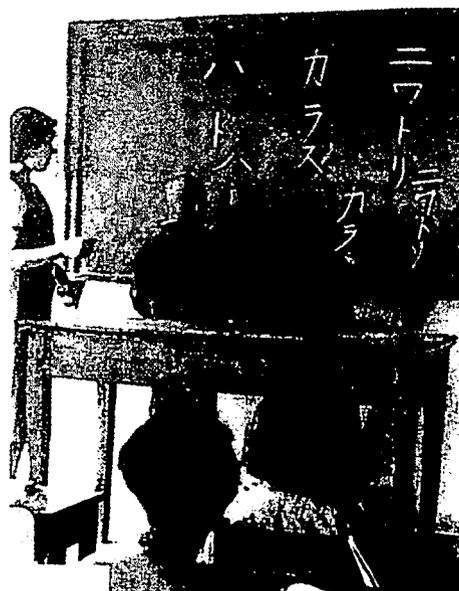
③校舎の中で生徒が並んで写っています。年代ははっきりしませんが、おそらく女学校の頃だと思います。小泉郁子先生が清水郁子となって日本人部ができ男女共学になりましたが、その前は女学校ですから女の子ばかりです。中国人がほとんどです。



④これは自分の学校のグラウンドです。当時では珍しく観覧席があって、どちらかというともアメリカナイズされています。まだ清水先生も若いですね。こういう形でグラウンドというか学内の設備に関してもかなり斬新なことをやられた。ここには写っていませんが体育館等にはシャワー室も設けられています。戦前の、1940年代の写真だと思います。



⑤これが崇貞学園の授業風景です。これは男子だと思いますが、当時では珍しい男女共学です。桜美林の名の元であるアメリカのオハイオ州にあるオベリン大学は、アメリカで最初に男女共学を果たした大学ですが、その思想を受けて清水郁子先生が男女共学を提唱していく形になります。



⑥これも学校風景ですね。崇貞学園そのものは先ほど申し上げたようにどちらかというともインターナショナルな要素を帯びています。中国・朝鮮（当時は日本）・日本と、とにかく自由で、日本国内がその頃どうでしたかはちょっと分かりませんが、元気に手を挙げているという感じですね。



⑦これが崇貞学園の講堂です。クリスチャン系の学校ですから屋根には十字架が付いています。かなりがっしりした講堂だと思います。戦前の一ミッションスクールで、しかも大学とかそういう大きな学校ではないところで、これだけの規模の講堂を持っていました。かなり立派な学校だったと思います。



⑧これは卒業時の記念写真です。真中に郁子先生と安三先生がいらっしゃいますね。けっこう中国人の教師もいたようです。最初はどちらかというと貧乏というか、極貧の中国人子女を相手にした学校経営をしていましたが、前列を見るとかなり上品な格好です。1944年ですから、かなり学校がきちんとしてからの卒業式だと思います。こういう状態の学校でした。

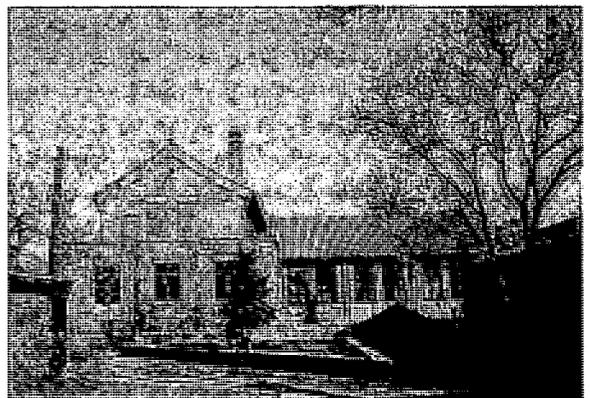


⑨少し前後します。これも年齢がはっきりしないのですが、崇貞学園の上のほうに崇貞女学校があります。先ほどの写真を見るとかなり小ざれい

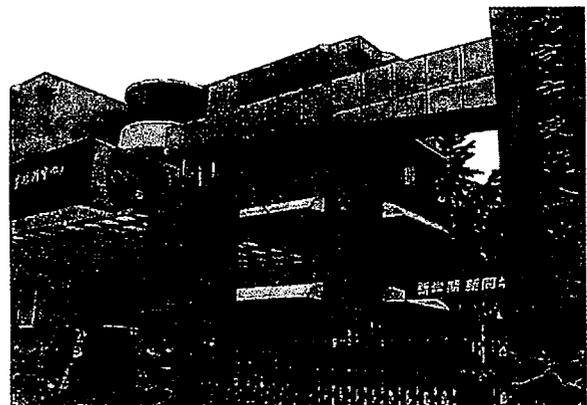
な格好でしたけれども、これは最初の頃ですから子ども達がいろんな格好をしていますね。



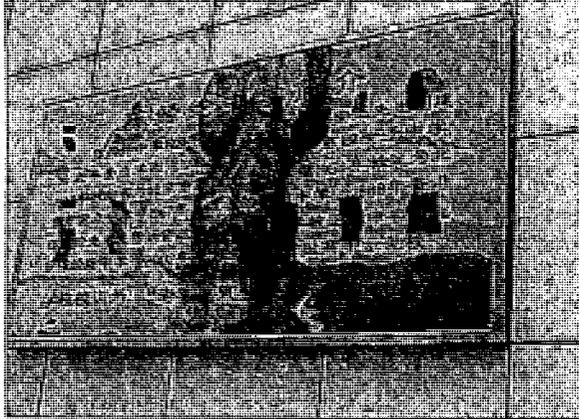
⑩これも校舎です。1980年代まで残っていましたが、今は解体されてこういう形では残っていません。安三先生の次男で桜美林学園の前理事長でした清水畏三先生がいった時に撮られた写真ではないかと思ひます。かなり立派な校舎ですね。



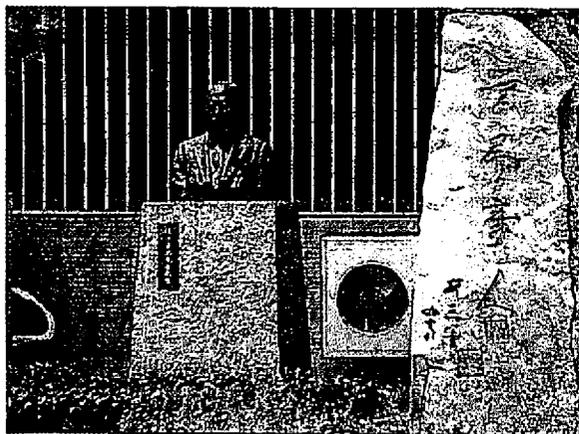
⑪これが現在の陳経綸中学の正門です。つい最近うちの仲間が行った時に撮ってきたものです。



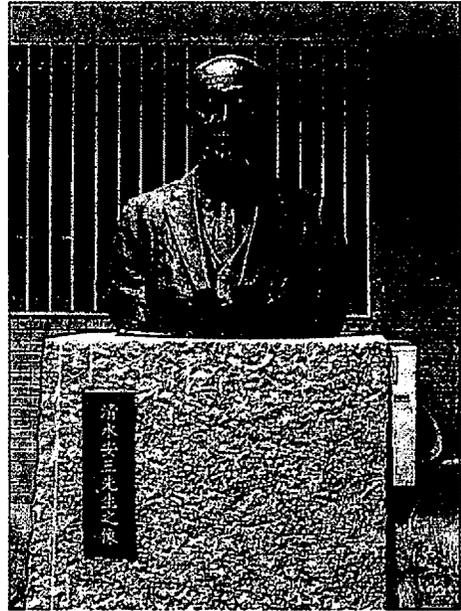
⑫僕は中国語が読めないのですが、陳経綸中学の紹介、および崇貞学園創立から80年の履歴が書かれていると思います。第4女子中学とか、こういう形で流れていて、現在は陳経綸中学となっています。かなり有名な学校みたいですね。



⑬私が10年ぐらい前にいった時に80周年の記念式典があって、その時に除幕式が確かあったと思います。これが「学而事人」、安三先生が常に言われていた「学んで人に仕える」という教えです。こちらが清水安三先生です。北京を引き揚げた頃の胸像だと思います。「北京では」という言い方だったと思いますが、日本人でこういう形で胸像が据えられるのは初めてだというお話でした。



⑭正式な清水安三先生の胸像ですね。桜美林学園の胸像（同じもの）は、現在、中学校舎1階フロアに設置されています。銅像（立像）は、現在、学園後方にある通称復活の丘と呼ばれる斜面に立てられています。学園全体を俯瞰できるビューポイントです。ここを学園の聖地と定めて、公園整備されつつあります。公開は2年後です。陳経綸中学ではこういう形で継承されています。



⑮胸像のある場所です。学内に入るとすぐ分かると思います。奥が校庭です。かなり立派な学校になっています。



以上、少し飛ばしましたが、清水安三先生はこういうことをやってきたという概略を、写真で説明させていただきました。これから話に移ります。私が持ってきたものを回覧していただきたいのですが、清水安三記念プロジェクトがここ5～6年にわたってシンポジウム、ワークショップを行った時にまとめあげたものです。李紅衛さんという方は、現在お茶の水女子大学の研究員ですが、この方が日本で（おそらく中国でも）初めて、清水安三先生のまとまった研究をした方だと思います。その李さんが集められた北京市の档案馆（とうあんかん。日本でいう文書館）の資料です。その他、子安宣邦さんが最近出した本『昭和とは何であったか』の中で、清水安三に初めて出会ったということで、感激の文章を書かれたのをお返ししてあります。

それでは清水安三先生から始めたいと思います。清水郁子先生は途中から絡んできますが、

清水安三先生は1891年（明治24年）、近江聖人中江藤樹の郷里に近い滋賀県高島郡新儀村（現在高島市）、琵琶湖の北岸にある小さな村の豪農の家の三男として誕生しました。幼少の頃はいろいろな夢をもたれたようでしたが、藤樹250周年の際、まず最初に藤樹になろうという夢を見ます。後に『朝陽門外』（1939年刊）が朝日新聞社から出て戦前の大ベストセラーになり、今でも古本屋等で調べれば出てきます。

武士の魂として、当時の人々の最も尊んだ刀を売って酒屋を開いて、無知蒙昧の百姓の若者を門弟とし、書を講ぜられた藤樹への傾倒は、安三先生の人格形成に大きく影響を与えたといわれています。藤樹の教育理念、創学精神「耕読」は、後に「工読」（Labor and Learning、工かつ読書）となり、先ほど「学而事人」という言葉を述べましたが、それにつながる崇貞学園および桜美林学園の原点ではないかと考えています。

安三先生は小学校を卒業したあと、滋賀県立第二中学校（現在大津市にある膳所高校）に入り、

ここでメレル・ヴォーリス先生に出会います。メレル・ヴォーリス先生は、1つは西洋建築で関西学院大とか韓国の梨花女子大、それから近江八幡の自分達の町づくり、洋館街、大阪教会など、伝道者ですから教会系の建築も多いのですが、大学やその他いろんな建物を建てています。そのかたわらヴォーリス合名会社（のちの近江兄弟社）の創立者の1人でもあります。近江兄弟社といえはメンソレータムとすぐ浮かぶように、メンソレータムの販売権を持っているような活動をしていらっしゃいます。その他、YMCA活動を通し近江ミッションを設立して、牧師さんではないのですが、信徒の立場からプロテスタントの伝道に従事した方です。このヴォーリス先生との出会いは、安三先生がキリスト教に目を転じていくきっかけになったと思います。少し、安三先生が書かれたものを読ませていただきます。

ヴォーリス先生の開くバイブル・クラスで学んだり、自身の悩みの解消に対し儒教の中に人間性の理想（というのは藤樹のことだと思います）を見たが、その理想に到達するには私は力不足であった。仏教（ご実家は門徒が多かった）は私の内面的な苦悩には無関心であったのに対し、キリスト教の教会に行くようになり、救いはキリストを信じる信仰を通しての恵みによるというはっきりとした確信へとイエスが私を導いておられる確かさに気づいた。

と、後年述懐しているように、この時期、大津のヴォーリス先生からおそらく英語とかいろいろ学んだと思うんですけども、大津の組合派（同志社も組合派です。組合派って何だといわれると、教団については詳しくなく、手詰まりで何とも答えようがないのですが）白玉町にある大津教会で洗礼を受けます。その影響で膳所中学から同志社の神学部に入學します。これが1910年です。

近江ミッションの中で最初の奥さんである美穂先生と出会います。

美穂先生は彦根藩士の上級武士の娘さんで、か

なり反対を押し切って教会に来られていたのを見初めたというか、そこで美穂先生との出会いがありました。その時点ではどうのこうのというのではないんですけども。

藤樹、ヴォーリズ先生、そしてもう一人影響を与えた人は鑑真。特に、同窓生によると鑑真和尚に傾倒してすごい影響力を受けたといいます。卒業時に奈良の唐招提寺に出かけてその伝記を聞いた時、鑑真の偉業に感銘を受け、中国からの日本文化への大きな影響を知って、我こそは第二の鑑真になってやろうと、日本版鑑真になることをこの時決意したという、何とも言いようのないエピソードを持っています。それで中国に傾倒していくわけですね。安三先生はこういいます。

この考えは「恩に報いる」をわきまえることだ。日本は支那から摂取しただけで、少しも与えることを考えなかった。これは「恩に報いる」をわきまえぬことだ。自分の出発はこの「報恩」の観念をもってしなければならない
ということで、キリスト教の下地はあるのですが、近江ミッションの伝道活動から離れて、中国への伝道を思い立ちます。ただヴォーリズ先生が「世界の中心は近江八幡にある」といい放ったロマンは、清水安三先生の中国での伝道活動に大きな影響を及ぼすと同時に、のちに学園の資金面で苦境に立たされますが、メンソレータムの中国での販売を介して、資金的な支援もヴォーリズ先生からかなり受けていらっしゃる。

同志社大で神学部を終えますが、その時にもう1人、中国で義和団事件の時に殉教したホレス・ペトキンという牧師さんについて、京都の平安教会で同志社総長であった牧野虎次郎先生が話されたのに感動して、鑑真和尚にプラス・アルファで「わしは殉教者になる」というようなことを考えるようになったと思います。ペトキンについての資料を読みます。

エール大学出身のホレス・ペトキンは、現在の河北省保定で教会と学校経営をし、伝道事業

に専念していた。1899年、義和団事件でいったんは妻子を伴って天津へ避難したが、「羊飼いが羊を忘れるのは卑怯である」と言って単身ホテルへ戻り、多年手がけていた教え子達のいる学校で、義和団の放つ弾に当たり殉教した。息子さんがエールにいたので、残された遺書には「エールよ、エール、我が子ジョンを25歳まで育ててくれ。25歳になったら保定に来たらせて我が遺志を継がせよ」と書かれていた。エール大学の教授や学生はそれに感動したといわれ、エール大学出身の牧野牧師（同志社の総長）はこのエピソードを泣きつつ語り、安三先生も泣きつつ聞いたといわれています。

これを機に先ほどの鑑真和尚、それからこのペトキンの影響を受けて中国への伝道を決意したといわれています。

その他、安三先生は内面の問題で、キリスト教系の大学神学部卒業でありながら、文学的なことも卒論で書いたということも紹介しておきましょう。

その内容はトルストイの貧しい人々に対する隣人愛と貧農の子どもを集めて教育を施し、労働の尊さを説いたキリスト教的人道主義の理想などをまとめたもので、「トルストイの内面生活の研究」というものです。

卒業後、志願兵で入隊し、1年で除隊します。その後、大正6年（1917年）に組合教会は中国に、日本人初の宣教師として安三先生を選んで派遣しますが、その前に大阪朝日と毎日の新聞社を訪ね、特に、大阪朝日では長谷川如是閑に「僕は支那に行って20歳代には小学校、30歳代には中学校、40歳代には高等学校、50歳代には大学を建てるつもりです」と豪語したといいます。これを長谷川さんがそのまま掲載したので、戦後に桜美林学園を形成していく過程でもこのエピソードを評して「法螺吹き安」、「法螺安」といわれていました。この法螺が本当に実現したので、すごい先生だと思います。

戦後 73 歳にして桜美林大学ができるんですが、帰ってきたのは 56 歳ですから、すごいパワーを持った先生です。

宣教師として中国に渡り、最初に行ったのは瀋陽です。安三先生によれば、「瀋陽の児童館（児童館が最初です）には、近郊から中国人が 3 分の 1、朝鮮人（族）が 3 分の 1、そして日本人が 3 分の 1」。

これはまだ学校ではありませんが、子ども達に通う児童館（セツルメントに近いもの）を作っていました。これは（中国人がどうのという話）、安三先生の文から引用したのですが、普通日本人でしたら日本人から書くのを、安三先生は中国人から書き出しているということはちょっと興味深いなど、私の印象ですけれども書かしていただきました。

この時期、最初の奥さんである横田美穂さんと大連教会で結婚します。美穂さんは 38 歳で亡くなるんですが、ご夫妻でこの児童館の経営、それから児童館が瀋陽から北京へ移って、初期の頃の崇貞学園の経営に献身的に取り組んでいくこととなります。瀋陽に 2 年ぐらいいて、その後北京に移ります。

安三先生は中国語ができたわけではないので、そのあと北京の大日本支那語同学会で北京語の猛勉強をします。ここから 20 数年間は中国の動きに合わせて安三先生の動きが活発になります。1919 年、五・四運動が始まりますが、その頃安三先生もかなり活発に動いていきます。

1919 年春、本格的に中国語と中国研究をするため、北京の大日本支那語同学会で学習に励みます。学校の課業の他に支那語の教師を招いて、支那（中国）語を必死に勉強しました。1920 年、華北で大旱魃が起き、瀋陽では児童館でしたが今度は災童収容所というのを建設します。これが崇貞学園の前身になります。ですから桜美林からすれば前々身である学校を作り上げていくわけです。

1920 年、北支那（「中国」といわないで「支那」

と読ませていただきます）に起こった旱魃に対し安三先生は、災童収容所の建設を北京の居留民会に提案しました。洪沢栄一の日華実業協会の委託により、北京の朝陽門外禄米倉に収容所を建設します。収容時には飢餓に苦しむ児童 800 名近くがいたといえます。いわば崇貞学園の前身です。

この災童収容所建設に影響を及ぼしたのが賀川豊彦です。明日の豊橋の市民祭にも賀川豊彦の展示があるようですが、ご存じのように賀川豊彦の「一粒の麦」が映画にも採用されている方で、実は桜美林学園の初代理事長でもあります。後ほど桜美林学園のところでお話ししますが、安三先生との出会いはこの頃です。

安三先生は北京に移り住んで間もなく、内山書店の内山完造の紹介で北京を訪れた賀川豊彦を天橋に案内しました。中国の研究者であればおそらくご存じだと思いますが、天橋は当時、泥棒市場といわれ、歓楽街兼貧民窟に近い状態でした。その時賀川に、「僕が君だったら支那の貧民窟に飛び込むがね」といわれ、これが先ほどの華北旱魃と相まって災童収容所建設に向かわせた要因になったのではないかと考えています。

先ほど申し上げましたように、1919 年に中国で五・四運動が起こります。東京朝日を抜けた長谷川如是閑が雑誌『我等』を、それから藤原鎌兄が主宰して『北京週報』を出しています。日本向けの新聞だったと思いますが、これは今もかなり残っています。この時、新進ジャーナリストの安三先生は、先の『北京週報』はじめ『日本及び日本人』『国民新聞』『読売新聞』などに積極的に寄稿しています。特に、五・四運動の見聞記は今なお貴重な記録として評価されています。『北京週報』への寄稿は 1927 年まで、94 篇に及んでいます。さらに 1924 年秋には『支那当代新人物』『支那新人と黎明運動』を大阪屋号書店から出版。その中には五・四運動の見聞記や、当時まだ名を知られていなかった魯迅とその作品を日本に初めて紹介することもやっつけています。

それから交友として、皆さんご存じだと思いますけれども五・四運動の指導者であった胡適や、共産党創設メンバーの李大釗などを紹介しています。同時に日本から来た作家や思想家など、かなりの人達をそれらの人物に会わせていらっしゃいます。先ほどの『支那当代新人物』『支那新人と黎明運動』では、大正デモクラシーのイデオログであった吉野作造に序文を書かせています。これらで稼いだお金は全部崇貞学園経営のための資金であったと解釈できるのではないかと僕は思っています。

それから1919年、胡適が師事したデューイも中国を訪問しています。安三先生の(将来の)交友であったジョン・デューイも教育関係者の方のご存じだと思いますので改めてご紹介することもないと思いますが、プラグマティズム教育の思想家であって、アメリカの教育に対してはかなり影響を及ぼした方だと思います。デューイの宿泊先近くに住んでいた安三先生は、自分から進んで面倒を見たといわれています。崇貞学園創立にはデューイの提唱する女子教育の重要性、それから工読主義教育が色濃く反映しています。安三先生が崇貞学園のモットーを「学而事人」としていることとも関連していると思います。

1920年、これが崇貞学園の創立記念日に当たるんですが、先ほどの災童収容所を解散します。5月28日、崇貞学園が開学します。これは桜美林学園の開学記念にも当たります。

災童収容所の解散時のお礼金を元に、朝陽門外に崇貞工読女学校を美穂先生と創立します。創立当初は安三先生が、これは桜美林学園でも同じことをしていますが、自ら広告文を書かれ、壁紙を貼って募集しました。最初は24名。おそらく最初の頃だと思いますが、先ほどの写真の中に写っています。教員が3人、3クラスでスタート。その後の募集広告でさらに人数が増え、60人までになりました。教室は化け物屋敷と呼ばれる中国の家屋で、それでも4棟あり、うち3棟を教室と

して、以後10年間崇貞学園を経営していきます。初代校長は美穂先生。当時の朝陽門外は清朝の八旗兵が失業し、その失業者が住むスラムであったといわれています。朝陽門外は子女を売る了頭(ヤアトウ)の地であり(これは安三先生が書かれた文章からそのまま引用しています)、人間の貞操が売買される貧民窟でした。この女性達を救うための教育を施す場、つまり「貞」(貞淑)を「崇」(たとぶ)というのが「崇貞学園」の名の由来です。

崇貞学園の教育で、まず始めたのは手芸教育です。午前中は普通の授業をし、午後手芸教育をするのですが、子女達が売春で売り買いされるのを救うための1つの手段だったと思います。ハンカチ、靴下編み、タオル織りなどを苦勞しながら実践教育し、それを主に西洋人の家々を訪問して売りさばいています。その後、チャイニーズ・リネン、いわゆるフランス刺繍によるテーブルクロスやビューロランナーに切り替え、北京、天津などの外人宅に売り出したところ、かなり売れたといわれています。安三先生は今度はこれを日本に持ち帰ります。ヴォーリス先生に見せたところ全て買われたということです。これに自信を得て、後年安三先生が米国オベリンに留学した時、美穂先生も一緒に行かれ、フランス刺繍の手法を学んで取り入れ、それを売りさばいたといわれています。崇貞学園の建設資金獲得のためにこういう苦勞もなさいました。

美穂先生は彦根藩士の長女で、お祖母さんは井伊直弼の奥方に仕えた豪胆女傑の方でした。美穂先生と安三先生の次男で前理事長の清水畏三先生は、美穂先生が38歳で亡くなられた時は子どもでしたが、京都で最後を看取られました。結核で亡くなったお母さんの弱々しい姿しか思い出せなかったのも、こんな氣丈夫なお母さんだったとは思わなかったと後年述懐しています。

安三先生との出会いは彦根教会で、同志社専門部家政科を卒業され、1918年大連教会で結婚。瀋陽(当時の奉天)で南満洲医大病院看護婦学校

の講師を務めます。北京に移られてから安三先生を助けて児童館の運営に当たると同時に、ご自身匪賊が跳梁する地方に単身赴いたというお話も残っています。24年、安三先生の留学に同道して渡米し、マクドゥエル・カレッジで洋裁（フランス刺繍も）を学んで卒業しています。孤児院等でも実地研修をされています。

27年、日本経済の不況で支援打ち切りに会います。安三先生はオベリン大学を卒業して帰国後、読売新聞北京特派員などを務めるほか、27年には蒋介石との単独会見に成功しています。安三先生はいろいろな形で崇貞学園の募金集めをし、その中で美穂さんは長男泰さん、長女星さん、それから（前の理事長である）次男の畏三さんの子育てに京都で専念するんですが、残念ながら先ほどいきましたように38歳という若さで亡くなります。清水畏三先生は美穂先生があまりにも苦勞された人生であったと思っていましたが、そうではなく、自ら進んでその道を選択され、死の直前にあっても安三先生を叱咤激励する、気丈の人であったことを後年知ることになります。

先ほどいきましたように、清水安三先生は、桜美林の名前の元であるアメリカのオベリン大に留学することになりますが、留学については倉敷美術館を作った大原孫三郎から資金援助を受けます。作家、城山三郎の『わしの眼は十年先が見える』（1994年新潮社から文庫本も出ています）の中にそのエピソードが書かれています。いきさつを少し紹介させていただきます。

大原孫三郎さんは安三先生の米国留学への資金援助をし、その後の生涯にわたって崇貞学園を支えていく大スポンサーでした。孫三郎さんとの出会いは、孫三郎さんが生涯一度だけの海外旅行として中国を旅行された時、安三先生が北京を案内されたんです。安三先生は阿片窟や阿片中毒診療所、貧民の娯楽場などを見学先に含め、上流、中流、下流の市民層の家庭訪問、大学教授や学生との懇談などを組み込みました。大原さんはその当時す

でに著名人ですから、外務省とかいろんなところが手を回して案内箇所を決めていたのですが、安三先生の提案そのものが気に入って、それが決め手になって案内してもらったといわれています。孫三郎さんは北京大の蔡元培総長をはじめ胡適、毛沢東等にも会っています。しかし、孫三郎さんはそういった人達に会うよりも、安三先生自身に興味を示したようです。その後、校地を拡充するのですが、校地の購入資金を提供しています。学園は1922年、工読女学校にほど近い芳草地に校地買収を開始し、30年には新校舎（いろんな大きい校舎がありました）を完成させ、31年には移転して中国教育局から正規の小学校に認定されました。当然ながら初代校長は中国の方で、羅俊英先生。その羅校長は魯迅が紹介したといわれています。

この辺のエピソードは『わしの眼は十年先が見える』という、大原孫三郎伝に書かれています。案内したお礼に何が必要かといわれた時、「わしは留学したいんだ」「じゃあ」ということでポイント、確か2500円ぐらいだったと思いますが、留学資金を出してくれた。それでオベリン大学へ行くことになります。なぜオベリン大学かというと、同志社大とオベリン大には関係があって、当時かなりの数の牧師さん達がオベリン大学に留学しているんです。オベリンは長老派で、組合派ではないんですけれども、そちらのほうに行くことになります。オベリン大は当時同志社大の留学先にもなっていました。このオベリン大で、日本で最初に男女共学論を唱えた小泉（旧姓）郁子先生と出会います。先ほどいきましたように中国の教育局から正規の小学校に認定されたので、魯迅が紹介した羅先生が校長先生になるんですが、羅先生は日本の敗戦後、日本に協力したということで逮捕投獄され、その後、残念ながら消息は分かっていません。中国当局には分かっているかも知れませんが。

1932年（昭和7年）、崇貞学園の理事会は授業

形態を変更します。午後の手芸労働、先ほどのフランス刺繍とかそういうことをやめて、全日授業に切り替えます。それに伴い授業料を取るようになります。これは手工芸販売が厳しくなって、寄付の募集が難航したことによるといわれています。それまでは、災童収容所から発展していますので授業料を取っていませんでした。翌33年には3・3制初級中学校の試行を開始します。これには崇貞小学校卒で現在も北京でご健在の馬先生が協力しています。

1936年、二・二六事件が起きたこの年に、安三先生は小泉郁子先生と天津教会で再婚されます。33年に美穂先生が亡くなった3年後です。33年から校長職にあった安三先生は崇貞学園の学園長に就任し、郁子先生が校長職に就きます。同年崇貞女子中学校を正式に設立します。また、朝陽門外における唯一の近代的校舎群が完成します。校地は7,000坪で、講堂、理科教室、礼拝堂と2階の教室を連結させた校舎です。それに伴い、小学校同様中学校も授業料を徴収することになります。工読女学校は崇貞学園に切り替わってまいります。それまではどちらかという貧しい中国の子女、朝鮮の子女等を入学させていたわけですが、授業料を徴収するということで上層インテリの子女もたくさん入学するようになり、郁子先生がそれらの教育内容を整備していきます。

郁子先生はこういわれています。「私はこの学園から将来支那婦人界をリードする女性を送り出したいものと願っている」。当時の生徒数は小学校6学級377人。中学校3学級68人。卒業生はもうこのあたりで500余名に至っています。日本への留学先もいろんな学校があります。卒業生の名簿があとのページのほうに出ていると思いますが、そういった方々で、朝鮮の方はまだ存命で韓国にいらっしゃいます。同志社の女子だとか女子美術だとか、そういうところに留学されています。

安三先生はやはり牧師さんですから、校務は優秀な郁子先生に一切任せて、自身は伝道活動に専

念することになります。

清水郁子先生の略歴を読ませていただきます。1892年、島根県の松江の生まれです。本名小泉イク。東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）の文科を卒業され、富士見町教会で受洗。その後、長崎県立高等女学校、兵庫県明石師範学校教諭などを経て、22年に渡米します。渡米したころは、明石でかなり影響を受けて最初は救世軍の士官学校に入ります。そこから24年に安三先生と同じオベリン大学神学部へ入学され、卒業後ミシガン大学の教育学専攻に進学されます。29年に修士号を取得され、博士課程に進学します。この資料収集のためいったん帰国するのですが、時局がら再渡米することができず、青山学院女子専門部の教授になります。優秀な方ですから教頭までいきます。

郁子先生は平塚雷鳥とか、当時の女性活動家とも親交があって、この頃いろんな活動をしています。言論関係でも、3冊しか書かれてませんが、『男女共学論』『明日の女性教育』『女性は動く』という本を書かれています。『男女共学論』は崇貞学園にも通じ、後に賀川豊彦先生とぶつかった原因でもあります。賀川先生は喧嘩別れのような形で理事長職を退くのですが、賀川先生は男子学校、小泉郁子先生と安三先生は男女共学をいい、それが喧嘩の元だといわれています。オベリンは男女共学と、もう1つは黒人の学生を初めて入れた大学です。そこを卒業されていますから、そういう信念が一貫して流れています。

34年、汎太平洋婦人会議に日本婦人代表として出席するためハワイへ赴きます。言論界でもそういう形でかなり活発に話されているわけです。翌35年には朝鮮、満洲、中国の主要都市の大学で講演もされています。そして、36年に再婚され、崇貞学園長に就任されます。これが郁子先生の概略ですが、当時の社会情勢を少し話してみたいと思います。

1932年、日本は満洲国建設からさらに隣接華

北への侵略を進め、日中戦争は長期化の様相を示し始めました。安三先生は35年、中国内陸地を長期にわたって視察しています。その見聞記の内容が36年にハワイの日系新聞『日布時事』に掲載されましたが、長期化は避けられないと予測しています。同年、蒋介石の信任が厚かった胡適に会い、戦争阻止を訴えます。また、37年に勃発した蘆溝橋事件について、これも有名なエピソードですが、北京を守るため日中両軍間を奔走し、北京にいた宋哲元軍を撤退させます。当時動いた今井武夫駐在武官の評伝が最近出ていますが、その方との関係、それからクリスチャンであった宋哲元との関係もあって、日本陸軍の北京の特務(松井機関だったと思います)と宋哲元とのあいだを行ったり来たりしながら、いろんな形で動いた。そのことはご自身のエピソードではかなり詳しく述べていますが、なかなか実態ははっきりわかりませんでした。今少しずつ証言が出てきて、徐々に客観的に見られるようになってきています。

郁子先生のほうは南京で蒋介石夫人であった宋美齡に会って戦争回避を訴えています。残念ながらそれはできなかった。ハワイでの汎太平洋婦人会議に宋美齡の関係者がいたのでしょう。その関係で宋美齡に会うことができた。また、1945年、崇貞学園の接收時、蒋介石夫妻に宛てた手紙も出てきています。このように、安三先生と郁子先生が現実に戦争回避を訴えたということが、徐々にわかってきています。

戦局がだいぶ悪化してきて、41年には太平洋戦争が始まりますが、その2年前の39年に、安三先生は崇貞学園の募金活動で訪米しています。郁子先生は学園の整備と拡大に力を発揮しますが、その背景では日本の対中文化政策がかなり変更され、軍部だけではどうにもならなくていろんな形で動いていきます。そのため朝日新聞社刊の『朝陽門外』とか、外務省情報部が劇作家上泉秀信に『愛の建設者』(安三先生の北京での活躍を中心にまとめたもの)を執筆させたり、1940年

にはその英文版まで出すなど、当時の軍部はかなりのキャンペーンをやっています。東亜同文書院ではどうであったかはわかりませんが、学園がその宣伝に利用されたのではないかという考えは否めないと、李紅衛さん達は見えています。

39年に朝日新聞社が安三先生を「北京の聖者」という形で持ち上げて、『朝陽門外』は朝日新聞社から出され、ベストセラーになっていくわけです。対中政策の変更によってこういう形で学園が逆に資金援助を受けてかなり大きくなっていきます。学園は38年以降、校地をさらに拡大し、図書館、体育館、2階建て大型教室やスタンド付きのグラウンドなども整備し、最初は中国人、あるいは朝鮮人等を入れていましたが、39年には日本人対象の3年制の中学部を併設し、日本人の子女を入れるようになります。学園は国際的な要素を帯び、太平洋戦争が始まる41年当時において拡大されていくこととなります。韓国併合前から朝鮮人は中国にかなりいたと李さん達は言っています。北京に多数いたその人達の子女が日本人対象の女子中学部に入ってきますが、けっこう成績は良かったということを行っています。

安三先生は朝鮮人の子女に対してかなり愛情をもって応えていたと思います。日本人対象の女子中学部の生徒の大半は朝鮮人子女で、安三先生は民族の誇りを自覚させようと、創氏改名が同化政策としてあったにも関わらず、これを拒否して学園内(学外ではとてもできないけれども)では元の苗字、たとえば鈴木なにがしが玄さんというふうに朝鮮名で呼び、しっかりと朝鮮語も学ぼうにしていた。教会に行くと、教会の中で朝鮮語を話せるようにしたということもいわれています。郁子先生と一緒に民族服を身に着けたりもして、日本の敗戦が濃厚(短波ラジオで情報を入手していたようです)になると、朝鮮の独立後に備えていっそう激励したといわれています。敗戦を予感していたということですね。



1939年、安三先生は校務を郁子先生に任せて、自身はまた貧民救済に乗り出します。皆さん中国に行かれていると思いますが、当時貧民窟あるいは歓楽街があった北京の天橋で安三先生はセツルメント愛隣館を開設します。一帯は、現在自然科学館になっており、私が行った当時は建物が残っていて、マクドナルドの販売店になっていました。その天橋の貧民街に貧民救済施設愛隣館を開設して館長に就任します。学園内では中国人のために崇貞教会を設ける一方、愛隣館では良質の飲料水を供給するために井戸を掘ったり、日本人の女医さんを常駐させて無料診療を実施したり、識字教育という今のユネスコに近いことも行っています。授産事業（まさにセツルメント）も手がけました。これは終戦まで続いています。

太平洋戦争が始まってからの活動については、どういう活動をされたかはなかなか見えてこないのですが、敗戦後1945年11月に北京政府により接收され、私有財産等も全部没収されて、最終的に1946年に仙崎に帰還されます。普通でしたら郷里へ寄ったりするのですが、不思議なことに東京へ直行されます。ここもまだ解明されていません。その翌日に再び賀川豊彦に会い、「君、もういっぺん農民学校を開いてみないか」といわれて、軍需工場の宿舎であった片倉工業の宿舎を、今風でいえばリニューアルする形で桜美林学園がスタートを切ります。その間わずか1年余りですが、どういう形で学園が桜美林学園に結びついていくのかは、まだはっきりわかりません。

敗戦の日、8月15日には安三先生が朝鮮の子女達に対して日本の罪を謝罪し、朝鮮独立万歳を叫んだといわれています。それが卒業生達の言葉の中に残っています。46年、中国を離れて仙崎港に帰還されましたが、そのあと安三先生はあれだけ貢献したにも関わらず一度も中国の地を踏まず、96歳で生涯を閉じます。郁子先生は残念ながら71歳で、確か大学を見る直前だったと思いますが亡くなられてしまいます。

著書目録を見ていただければわかるように、膨大な量のものを書かれています。収集を兼ねてワークショップとかいろんなことをやってきましたが、なかなかうまくいっていません。遺品等は収集活動があって一次資料までは何とか整理できるようにりましたが、まだまだこれからも掘り起こしを継続していかなければならないと僕等も考えています。ということで、ざっとですが話をさせていただきました。どうもありがとうございます。

【今泉】 ありがとうございます。レジメを元に詳しく発表していただきまして、崇貞学園と創始者の清水安三さんと奥さんである郁子さんの経歴や人柄についても触れていただきました。これから予定された時刻まで30分ほどありますので、講師にご質問いただき、またご意見があれば出していただきたいと思います。

【黒田】 答えられる範囲で答えさせていただきます。

【石田】 東亜同文会に関するところで質問したいのですが、「日本の対中政策の変化でだいぶ性質が変わってくる。戦局は悪化するが学園は拡大する」ということで、対支文化事業部との関わりがあると思います。今のご紹介では曖昧なままでしたが、具体的に資金的な記録とか、どれくらい日本側から資金が投入されていたとか、そういうところは明らかになっているのかどうか。なぜかといえばこの時期に東亜同文会が北京に進出したようにした時に、崇貞学園を女学部として吸収合併させようという案が出されました。しかし、外務省の対支文化事業部は「ここは独自で規模を拡大しつつやっているから」と。はたから見ると同文会のほうがはるかに規模は大きかったはずなんですけど、最初から同文書院が入ってきちゃだめだよということで無視された。それからすると同文書院側から見た場合には、北京地域での崇貞学園というのは日本の軍政、占領政策の中でもかなり深く踏み込んで活動していたのではないかなと

いうイメージがあったもんですから、そのあたりどれぐらい具体的なことが今分かっているのかを……。

【黒田】 先ほどいいましたように、実はこの辺の中国での研究がほとんどできていなかったんですね。資料にございますとおり北京の档案館で見つけた資料などを基に李紅衛さんが博士論文として初めてまとめあげて、その著書が間もなく出版されるんですが、その中でもおそらく、日本からどのぐらいの資金援助があったかというのはすべてではないように思えます。ただミッションスクールですから自分でかなり募金活動をして集めて、関西の財界（これもはっきりわかっていませんが）先ほどいいました大原さんなどからかなりの資金援助を得たり、教会からの資金援助等で経営をやっていたという状態です。それと国からの資金援助もあったと思います。たとえば、太平洋戦争が始まってからですが1941年に金杯をもらうのですが、そう意味では実のところまだまだ未整理というのが実情です。安三先生の書いたものもその辺は曖昧で、われわれもかなり苦勞して調べてはいるのですが、何せ相手国が中国で、資料はおそらく持っていると思いますが、学園の経営の実態とか、資金などお金の問題はどうもまだはっきり分かっていないのが実情です。

実は崇貞学園の学園報のようなものがあって、おそらくそのなかには全国の教会に宛てた募金活動の記事もあり、募金者の名前がズラッと載っているはずなんですが全号揃っていない。それから私が先鞭をつけた大原美術館にある大原家の倉庫の調査ですが、そこに安三プロジェクトの関係者が入ったのは3人目か4人目ぐらいで、まだ手つかずの状態にあるようです。孫三郎の評伝で書かれたようなことは事実としてあったとしても、その後終戦直後まで安三先生は終戦直後まで募金活動で大阪に来たりした時に孫三郎さんのところに寄ってるはずですが、3つほどある倉庫の中にはその証拠となるような手紙類が一切出てこない。

このように安三先生の書かれたものは多数あるのですが、その裏付けになるものは今のところ微々たるものです。ほんとうはそこがわれわれも一番知りたいところです。

【石田】 ありがとうございます。

【藤田】 それに絡んで、民国政府が確立してから後、たとえば旅順や大連を中国に戻せとかいう運動の中で、教育の改悛というのがあるんですね。特に外国勢力が入ってきているんなクリスチャンの学校を作っていました、そういうものを排除するという動きによって欧米から来ていた学校は撤退していくんですけど、崇貞学園はクリスチャン関係の学校なのにそのままそこに存在した。同文書院の場合はけっこう上層部と関わりがあったため免れてそのまま存続することになったんですけど、崇貞学園が存続したのにはどういう理由があったのかを知りたいのですが。

【黒田】 これはおそらく安三先生というよりも郁子先生の関係のほうが大きかったような気がします。郁子先生と日本との関係ですね。安三先生は同志社との関係や関西の財界との関係がかなりあったようなことがいわれていますが、先ほどいいましたように、その辺がまだ明確ではないんですね。藤田先生がおっしゃっていることは非常にわかるんですが、まだその辺まではわかっていない。本来桜美林の同窓生がもう少し客観的に調べ上げていれば、たとえば、安三先生が存命中にかなりの部分、聞き取りができたはずなんです、それすらもできなかった。あまりにも安三先生への思い入れが強すぎたために同窓生は安三先生の言ったことをそのまま信用してしまった。戦後の桜美林学園の歩みは、ある程度わかりますが、戦前の崇貞学園に関してはほんとに手つかずに来てしまい、やっと十数年前、清水畏三先生の指示で、僕とか桜美林学園の先生で、牧師でもある小林茂さんにそれらを調べよということで始まったんです。今から20年ぐらい前に初めて手がついた。その後、この研究会ができたのですが、まだ



十数年しか経っていません。僕は廊下鷲みたいな感じで、個人的なことになりますけれど、あっちへ走り回りこっちへ走り回り、やっと中国文学の丸山昇先生（故人）を口説いてプロジェクトの委員長になってもらった。また、樽松かほる先生が女性教育の問題を教育史学会でやってたものだから、その先生も口説き落としてひとつの形ができあがり、第1回目の「清水安三の思想と教育」という形でワークショップを開くことができたというわけです。

中日関係の近現代史の研究者は、いるようでいないというか。先ほどお話しした阪大の名誉教授である子安先生が最近出された『昭和とは何であったか』という本に安三先生の『朝陽門外』について触れていますが、「初めて知った」という。『朝陽門外』はベストセラーになっているし、山崎朋子さんも『朝陽門外の虹』を書いているのに、そんなばかな、と思います。子安先生はそういうものを全然読んでいなかった。だから満州事変から太平洋戦争に至る日中関係、特に教育分野なんかは非常にわかりづらいし、それとの関係における植民地政策なんかもわかりづらい部分がある。研究者も、特に中国の関係者はできなかった時代がずっと続いていたと思われるので、李紅衛さんなどはこの分野では初めてだと思います。その意味で今回の出版はすごく期待しています。その出版で面倒を見てこられた阿部先生が愛大のシンポジウムにこられると聞いて、そこにも何か縁があるのかなと思っています。

【藤田】 特に日本側との関係と言うよりは民国政府との関係が決め手だったのではないかと思います。その辺はなかなか資料的にむずかしいですね。

【黒田】 李紅衛さんも北京の档案館に入るのがかなり難しかったとってました。彼女は無錫生まれですが、中国人ですらなかなか入れなかったようです。北京の档案館にそれらの関係資料があるということは彼女は知ってたんだけど、東亜同

文書院の資料調査について話していただいたのは今泉先生でした。その時、李紅衛さんはまだ教育問題に多少調査を始めるという状況であって、安三先生についてはまだ序の口ぐらいで、研究会の発足と同時に李さんも加わってきて。ですから、同時進行みたいな形ですすんできており、われわれも李紅衛さんが持ってくる北京の資料を見てはびっくりして、「へえ、こんなことをやっていたの」という状況でした。李紅衛さんの経歴を若干ご説明しておきます。

1966年、李紅衛ですから紅衛兵の申し子だと自分でいっているように、文化大革命の頃に生まれて、無錫の江南大学の日本語学科を卒業。1996年にお茶の水女子大に來られて教育学科の故小川先生のもとで学び、修士を卒業され、2007年にこの論文で学術博士を取られて、現在はアソシエイト・フェローという形で研究員をしています。彼女からももらった資料に朝鮮人の卒業生の略歴があります。

その中の玄次俊さんはもう80歳になんなんとするのですが、原文はハングル語でなく非常にきれいな日本語で書かれています。ご当人が書かれた文章をそのまま写しただけで、何の手も加えていません。玄さんはクリスチャンで、卒業後、北京の第一高等女学校の講習科を受け、1年後、初等科訓導の免許を取って日本国民学校の教師になります。終戦後韓国に帰り、すごいと思うのは警察専門学校へ入学して1年か2年、警察学校の勉強をし、そのまま残って2年間事務の仕事をしました。主婦になって10年前から日本語塾の講師を始めた、というようなことが書かれています。だから崇貞でかなりきちっと学ばれたと思います。僕なんかも「黒さん、黒さん」といわれて可愛がってくれます。

2人目の朴世玉さんは韓国生まれです。お父さんは大使館に従事されていて、僕も初めて知ったのですが、朝鮮人担当だったということです。創氏改名で木村さんという名前です。在学中にクリ

スチャンになっていきます。同志社の家政科に行かれて、玄さんと2人で日本へ来て、僕も関西旅行なんか一緒に行ったんですが、同志社ではかなり懐かしく旅をされていました。

韓鳳梧さんはまた全然違いますが、私の師事する安宇植先生のお話では、クリスチャンから朝鮮独立運動に関わっていく人がけっこういたというのですが、この韓さんのお父さんも朝鮮独立運動家で、15歳から革命に参加して亡命生活をし、37歳の若さで亡くなりました。韓さんの日本名は村田さんです。この方も同志社へ行って、韓国へ帰って大学に編入して卒業し、高等女子学校で教鞭を取られました。

尹淑子さんは大連生まれです。やっぱり独立運動（三・一運動）に参加して中国へ亡命しました。これも李紅衛さんが調べているのですが、卒業生には朝鮮人が半分ぐらいいて、お金持ちか、こういう形で朝鮮独立のために働いた人達が亡命してその子女が崇貞学園へ行っていた。崇貞学園で囲われるということで、子ども達に対する民族的な支援活動を学校内でしていたということを実に物語っているのではないかと思います。

あと現在まだ存命だと思いますが、崇貞学園の理事にもなられた馬さんという方がいます。馬先生は日本にもたびたび来られ、いろんな会話を交わしています。

みんな日本語がものすごく上手だし、日本人部で英語教育、語学教育を崇貞学園は熱心にやっていたから、その時の英語教育が後年日本へ帰ってきて大変役に立ったと同窓生はおっしゃっています。中学部で大学と同じぐらい6コマの英語教育をやっていたといわれています。1週間に6コマですから猛烈ですよ。なおかつ日本語の授業もあったといいます。日本からの資金援助を受けながら、日本ではおそらくできなかったことを中国の地でやられていたわけです。

また、安三先生と関係した人物にはクリスチャンコードで結ばれており、情報交換もかなり頻繁

に行われていたのではないかと。先にも言いましたが、その関係で蘆溝橋事件に関しても働きができた。先ほどの宋美齡の関係もクリスチャンコードですよ。さらに、若かりし30代、40代頃は中国共産党の最初の頃のメンバー、毛沢東や李大釗と付き合い合っていて、魯迅や内山完造とも付き合いがある、というようなことで、とにかく人に付き合い合うのが上手だったなという感じをすごく受け取りますね。

【大島】 大変興味深いお話や初めて聞くお話で大変参考になりました。私はこの東亜同文書院大学記念センターで客員の研究員として、「東亜同文書院から愛知大学」という大学史をやっております大島と申します。ここでまずお聞きしたいのは、1944年といえますと日中戦争が行き詰まっていた時期ですが、北京地域は完全に日本軍の占領下にありました。それにも関わらず崇貞学園は南京国民政府より100万円の報奨金を受領している。どうしてこんなことが可能であったのかという、これが一番の疑問です。1921年に崇貞学園は設立されますが、その監督官庁や、それに適用される教育法規などは中国国民政府の教育省の監督を受けていると思うんです。それが続いていて、しかもキリスト教関係により中国人に深い人脈を持っている。今日のお話の中から考えられることは、キリスト教的な考えで、反戦論者ではないけれども非戦論者であると。そのことからこういうことも可能になったのではないかと思います。

これは私の受けた印象なのですが、1920年代というのは日中戦争が始まる前で、世界的にはワシントン体制という国際関係ができあがり、日本はアメリカやイギリスに対して話し合って融和し協調していくと同時に、その圧力もあって中国に対しても協調している。そこで東亜同文会関係ですと、東亜同文書院は一応別にして中等学校レベルでは天津や漢口で中学校を運営しています。経営は日本側がイニシアティブをとっていますが、新たに中国の法制や教育法制に合うものに再編成

していますね。そういう雰囲気は20年代にはあり、崇貞学園の設立も容易であったという気がします。

もうひとつ、東亜同文書院の根津先生という人は非常に尊敬に値する人だと私は思っていますが、残念ながら上海には根津先生の銅像はありません。あったのですが撤去された。(内山完造の銅像はありますけれども。) それに対して崇貞学園の場合、これはおそらく誇るべきことだと思いますが、新中国になった後も存続して、その中学校が創立者の銅像を残している。これはやはり清水先生が徹底的な非戦論者で、貧しい人間だけでなく圧迫されている人間を匿ったり庇護したりしたことを中国人が認めているということの証拠ではないかと思えます。同文書院の根津先生の銅像が上海交通大学にあったらと思えますが、それは不可能かもしれませんね。

【黒田】 ありがとうございます。陳経綸中学というのは、又聞きですが、香港の財閥であった陳経綸という方が、個人的なお金を出された。中国ではどのような仕組みになっているのかはわかりませんが、公立の学校に陳経綸という名前が付いています。

安三先生と戦後の中国との関係でいいますと、戦後1、2度中国からお招きがあったのに中国の地を踏むことはなかった。中国から教育使節団が来られた時、安三先生は出かけられているんですね。お歳かなと思えますが、65歳から96歳まで30年間ぐらい、ヨーロッパへ行ったり、戦後ブラジルまで桜美林のために募金活動に行かれていたわけですね。それだけのエネルギーを持った方がなぜ中国には行かなかったかというのは大きな疑問です。

このように安三先生ご自身が書いたものはかなりあるのですが、たとえば『北京週報』にしても94点も書いていながらやはり抜けていたり、『支那之友』という、学校経営・募金活動に関わるものがほとんど出てこない。樽松先生や李紅衛さん

たちが東洋文庫やキリスト教関係に手を尽くしてもなかなか出てこない。4頁ほどのものと思うのですが。

その過程で、関西で個人的に持っていらした方がいて、その方が持っているのが唯一のものだと聞いています。おそらく北京のどこかにまだ眠っているのではないかと李さんもいっていますが、それを調査するのもまだまだ難しい状況だといえます。崇貞学園の卒業生も東亜同文書院と同じように存命されている方が少なくなって、調査も難しくなっています。それでも何とか続けてやっていきたいなと思っています。

【今泉】 そろそろ時間ですので、私が最後に。中国国家図書館の未整理の資料をデジタル化する文献センターが新しく設けられ稼働したといわれています。その研究員の王広生さんという方がたまたま北京国会図書館と日本の国立国会図書館との留学研修協定により半年間日本に来ており、記念センターを最近訪問されました。藤田先生と武井さんと私がお会いし、伺ったことですが、未整理のロシア語の文献と日本語の文献を新しく設立したセクションでデジタル化したいという構想のもとで始まったといえます。ですからわれわれがかなり前から追求している同文書院の資料や、また崇貞学園の資料も未整理のまま所蔵されているとすると、公表されるというか整理されるチャンスが巡ってきたかなという気がします。しかし、期待が空振りに終わるかも知れません。同文書院関係は私が目で見ましたのでありましたけれども、崇貞学園のものがあるかどうかは保証の限りではありません。しかし北京で接收されたもので今のお話のような背景だとすれば、それなりにきちっと保管と言うか、未整理のままあるのではないかなという気がいたします。

さらに、これは私の感想ですが、戦前の日本人が書いた中国に関するいろいろなものを、良いのも悪いのも全部戦後は無視されている。たとえば内山完造が書いたものもたくさんあるし、清水

安三もそうですが後藤朝太郎やいろいろな人が書いています。しかも、その当時はそれが非常に大きな影響を与えたということが他の人達の話から出ています。それをわれわれ（私も70を過ぎたんですけど）を含めて今の若い方まで、日本人が戦後無視してきたということがあるという気が

します。われわれ自身の手でもう1回きちんと整理し確認しなければいけないというのが感想です。

時間になりましたので、まだ何かあるかと思いますが、これで終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

清水安三年譜

| 西暦 | 和 | 暦 | 月 | 日 | 歳 | 清水安三先生記録 | 関係書誌 | 一般社会 |
|------|---|----|----|----|----|--|-------------------|---------------------|
| 1891 | 明 | 24 | 6 | 1 | 0 | 滋賀県高島郡新磯村大字北畑 655 番地に父清水弥七母清水ウタの三男として生まれる。血液型O型。 | | 大津事件 (5.11) |
| 1896 | | 29 | 1 | 27 | 4 | 父弥七永眠 | | |
| 1897 | | 30 | 9 | 25 | 6 | 中江藤樹祭 250 周年、藤樹さんになる決心 | | 樋口一葉没 (11.23) |
| 1898 | | 31 | 4 | | | 安井川小学校入学 | | 義和団事件 (1898 - 1900) |
| 1902 | | 35 | 4 | | 10 | 安曇高等小学校入学 | | |
| 1906 | | 39 | 4 | | 14 | 滋賀県立第二中学校入学 W. M. フォーリス先生に出会う | | 日露戦争 (1904 - 05) |
| 1908 | | 41 | 4 | 1 | 17 | | | 膳所中学校と改称 (4.1) |
| 1910 | | 43 | 3 | 24 | 18 | 膳所中学校卒業 | | |
| | | | 4 | 9 | | 同志社大学神学部入学 | | |
| 1912 | | 45 | 7 | 8 | 21 | 彦根教会で夏期伝道 横田美穂と出会う | | 中華民国成立 (1.1) |
| 1913 | 大 | 2 | 7 | 22 | 22 | 祐崎教会(新潟)で夏期伝道(ニヶ月) | | |
| 1914 | | 3 | | | 23 | 「支那漫遊記」(總宮蘇峰著)を読み、唐招提寺で鑑真和尚の話聞き、中国へ心を開ける | | 第一次世界大戦 (1914 - 18) |
| 1915 | | 4 | 1 | 3 | | 夜平安教会の初週祈禱会でベトキン宣教師殉教の話聞き中国に行く決心を固める | | |
| | | | 3 | | | 同志社大学卒業。三ヶ月後で大学設立の夢を語る | 卒論「トルストイの内面生活」 | |
| | | | 4 | | | 基督教世界社就任 宮川経輝牧師に会う | | |
| | | | 12 | 1 | 24 | 歩兵第九連隊に一年志願兵として入隊 | | |
| 1917 | | 6 | 5 | | | 少尉任官試験に合格。故郷に錦を飾る | | |
| | | | 5 | 28 | | 除隊 | | |
| | | | 5 | 29 | | 郷里の母に挨拶 | | |
| | | | 5 | 30 | | 日本人宣教師第一号として中国への送別会(日本組合基督教会本部主催) | | |
| | | | 5 | 31 | | 送別記者会見で50歳で大学設立の夢を語る | | |
| | | | 6 | 8 | 26 | 大連着 | | |
| | | | 6 | 14 | | 奉天(瀋陽)の満鉄小学校で第一声 | | |
| | | | 6 | 15 | | 張作霖に面会「日本から嫁がせる花嫁」と紹介 | | |
| | | | 7 | 22 | | 瀋陽基督教会開所式 | | |
| | | | | 29 | | 第一回日曜礼拝 | | |
| 1918 | | 7 | 5 | 28 | | 横田美穂(24才)と大連教会で結婚式。司式磯部敏郎牧師この年児童館を開設 | | シベリヤ出兵 (8.2) |
| 1919 | | | | 25 | 27 | 北京に移住。美穂夫人は神戸の女子神学校へ | | |
| | | | 4 | | | 大日本北京支那語同学会入学 | | |
| | | | 5 | | | 北京在留邦人による日本軍出兵決議に一人で反対 | | |
| | | | 1 | | | | 「支那生活の批判」(我等) | 5.4 運動 (5.4) |
| | | | 12 | 1 | 28 | | 「在支外人生活の批判」(我等) | |
| | | | | 22 | | 児童収容所を作り 799 名の児童を収容(「朝陽門外」により) | | |
| 1920 | | 9 | 1 | | | | 「若き支那に於ける諸問題」(我等) | |
| | | | 3 | 31 | | 大日本北京支那語同学会卒業 | | |
| | | | 5 | 27 | | 災児収容所解散 | | |
| | | | 5 | 28 | | 朝陽門外に崇貞工務女学校を設立。校長清水美穂。生徒 26 名。(日記による。「朝陽門外」では 24 名) | | |
| | | | 8 | | 29 | | 「支那最近の思想界」(我等) | |
| | | | 11 | 1 | | | 「支那に亡国の兆ありや」(我等) | |
| | | | 12 | | | | 「支那を動かす迷信の力」(我等) | |
| 1921 | | 10 | 3 | | | | 「支那改造の原理」(我等) | |

| 西暦 | 和 | 暦 | 月 | 日 | 歳 | 清水安三先生記録 | 関係書誌 | 一般社会 |
|------|---|----|----|----|----|--|---|-------------------|
| | | | 5 | 28 | | 崇貞学園設立（「基督教世界」による） | | |
| | | | 7 | 22 | 30 | 長男泰（たい）誕生 | | |
| | | | 11 | | | | 「支那共同管理論の検討」（我等） | 「阿Q正伝」巻迅（12） |
| 1922 | | 11 | 1 | | | 北京週報論説記者となる | 「北京週報」に論説掲載 1927号まで数十回 | |
| | | | 6 | | 31 | | 「支那反基督教運動の一考察」 | 森四外没（7.9） |
| | | | 10 | 14 | | 長女星（ほし）誕生 | | |
| | | | 11 | | | | 「支那の話 その1」（我等） | |
| 1923 | | 12 | 3 | | | | 「支那の話 その2」（我等） | 関東大震災（9.1） |
| 1924 | | 13 | 7 | | 33 | 大阪教会で接手札を受け正教師（牧師）となる | | |
| | | | 7 | | | 美穂夫人と共に米国留学のため北京を離れる | | |
| | | | 9 | | | オベリン大学留学 | | |
| | | | 9 | 20 | | | 「支那新人と黎明運動」（大阪屋書店） | |
| | | | 11 | 10 | | | 「支那当代新人物」（大阪屋書店） | |
| 1925 | | 14 | 9 | | | 崇貞学園チャペル献堂式 | | 孫文没（3.12） |
| 1926 | | 15 | 5 | | 34 | オベリン大学卒業。B.D.（神学士）受領 | "A Statement of theology" by y.s. | |
| 1927 | 昭 | 2 | 1 | 1 | 35 | 次男長三（いさう）誕生 | | |
| | | | 3 | 19 | | 蒋介石と単独会見 | | 南京事件（3） |
| 1928 | | 3 | 6 | | 37 | 読売新聞北京特派員となる | | |
| 1929 | | 4 | 1 | 1 | | | 「支那革命史論」（旅順・南満州教育会） | |
| | | | 4 | | | 一時帰国 基督教世界社編集主任 | 「湖畔の聲」に論説掲載 1932号まで数十回 | |
| | | | 7 | 11 | 38 | | 「支那基督教史論」（基督教研究） | |
| 1930 | | 5 | 4 | | | 同志社大学講師（中国政治思想史、中国史、中国哲学史）野球部長 同志社中学講師（漢文学） | | 内村鑑三没（3.28） |
| | | | 7 | | 39 | | 「江西学に関する一考察—藤樹学探源」（キリスト教研究） | |
| 1932 | | 7 | 3 | 24 | | 同志社大学講師辞任 | | 満州国建国宣言（3.1） |
| | | | 3 | 25 | | 近江兄弟社北京駐在員 | | |
| 1933 | | 8 | 3 | 20 | | | 「支那語説本」（大阪・一番堂書店） | |
| | | | 12 | 19 | 42 | 清水英穂召天（38才） | | |
| 1936 | | 11 | 6 | 1 | 45 | 清水安三（45才）小泉イク（43才）天津教会で結婚式挙行 | | 二・二六事件（2.26） |
| | | | 6 | | | 崇貞学園増設（7000坪の土地、講堂、理化教室） | | |
| 1937 | | 12 | 6 | | | 戦争阻止のため胡適らと話し合う | | 中国軍北京守備軍七千撤退 |
| | | | 7 | | 46 | 北京を戦禍から守るため、日中両軍司令官にかけ合う | | 盧溝橋事件日中戦争始まる（7.7） |
| 1938 | | 13 | 6 | 10 | 47 | | 「支那の人々」（東京・関友社） | |
| | | | | | | 天津孫伝芳氏未亡人から「愛隣館敷地」の寄贈を受ける。六月会館建設起工、12月完成 | | |
| 1939 | | 14 | 1 | | | 北京市天橋にセツルメント「天橋愛隣館」設立 館長（安三）現地委員長（郁子）となり、その経営に従事（1945.8まで） | | |
| | | | 3 | 20 | | | 「姑娘の父母」（東京・改造社） | |
| | | | 4 | 15 | | | 外務省情報部は劇作家上泉信氏により「愛の建設者」（東京・北星堂書店）を執筆出版させた。 | |
| | | | 4 | 20 | | | 「朝陽門外」（大阪朝日新聞社）ベストセラー | |
| | | | 12 | | 48 | 崇貞学園募金キャンペーンのため訪米の途につく | | |
| 1940 | | 15 | 3 | 2 | | | 「大陸の聖女」（松本恵子著 東京・関友社） | |



| 西暦 | 和 | 暦 | 月 | 日 | 歳 | 清水安三先生記録 | 関係雑誌 | 一般社会 |
|------|---|----|----|----|----|---------------------------------------|---|------------------|
| | | | | 5 | | | 「開拓者の精神」(東京・隣友社) | |
| | | | | 7 | 49 | 北京帰省 北京駐在の日本憲兵隊によりドル買の疑いで取調べを受ける | | |
| | | | | 7 | 18 | | 「上記上泉著の英訳『A Japanese Pastor in Peking』出版(東京北星堂書店)日本人の中国での慈善を宣伝」 | |
| | | | | 8 | | 母清水ウタ召天(94才)キリスト教の洗礼を受く | | |
| 1941 | | 16 | 4 | | | 北京崇貞学園に日本入部設置 | | |
| | | | 12 | 8 | 50 | | 「支那の心」(東京・隣友社) | 太平洋戦争始まる(12.8) |
| | | | | 18 | | 天皇より御内幣金拝領(手工芸…のため) | | |
| 1943 | | 18 | 5 | | 51 | 日本基督教団華北布教区議長 | | |
| | | | | 8 | 20 | | 「支那人の魂を掴む」(東京・創造社) | |
| 1944 | | 19 | 5 | | | 南京国民政府より100万円報奨金受領 | | |
| 1945 | | 20 | 8 | 15 | 54 | 韓国朝鮮人生徒達に日本人の罪を謝罪、朝鮮国の独立万歳を叫ぶ | | 日本敗戦(8.15) |
| | | | | 8 | 20 | 崇貞学園第二学期始業式で日本帰国を表明 | | |
| | | | | 11 | 8 | 北京市政府教育局により崇貞学園接收、私有財産も失い無一文となる | | |
| 1946 | | 21 | 3 | 15 | | LST(米軍上陸用船艇)に乗船、中国を離れる 途中生きる希望を失う | | |
| | | | | 3 | 19 | 山口県仙崎港に上陸一人千円づつ支給 | | |
| | | | | 3 | 22 | 早朝東京着、焼野原で折る | | |
| | | | | 3 | 23 | 賀川豊彦氏と神田小川町交差点で邂逅、六月二日まで林彰文堂の片瀬別荘から通勤 | | |
| | | | | 3 | 24 | 東京都南多摩郡忠生村大字木曾2693番地に学園設立を決意 | | |
| | | | | 4 | 10 | 文部省に桜美林学園設立申請 | | |
| | | | | 5 | 5 | 桜美林学園開校式 | | |
| | | | | 5 | 29 | 桜美林高等女学校、英文専攻科設置認可 | | |
| | | | | 5 | 29 | 学園長清水安三、校長清水郁子 | | |
| 1947 | | 22 | 3 | 22 | 55 | 桜美林中学校設立認可 校長清水郁子 | | 日本国憲法施行(5.3) |
| 1948 | | 23 | 3 | 10 | 56 | 桜美林高等学校設立認可 校長清水郁子 | | |
| | | | | 9 | 1 | | 「希望を失わず」初版本(桜美林出版部) | |
| | | | | 12 | 25 | | 「中江藤樹の研究」(桜美林出版部) | |
| 1950 | | 25 | 3 | 14 | 58 | 桜美林短期大学(英文科)設立認可 学長清水安三 | | |
| 1951 | | 26 | 3 | | | 桜美林学園募金キャンペーンで北米南米旅行 | | 朝鮮戦争始まる(6.25) |
| | | | | 7 | 25 | | 「希望を失わず」改訂版『The Story of Obirin』(桜美林出版部) | サンフランシスコ条約(9.8) |
| 1953 | | 28 | 3 | | 61 | 安三・郁子帰国 | | |
| 1955 | | 30 | 3 | | 63 | 短期大学に家政科設置 | | |
| | | | | 8 | 1 | 64 | 学園誌「復活の丘」発刊 | |
| | | | | 8 | | | 「復活の丘」に自叙伝・聖書講義等連載 | |
| 1958 | | 33 | 3 | 31 | 66 | 最初の鉄筋コンクリート校舎「明々館」落成 | | |
| 1959 | | 34 | 4 | 21 | 67 | | 「中江藤樹はキリシタンであった」(桜美林出版部) | |
| | | | | 4 | 25 | | A MUSTARD SEED IN JAPAN (W.M.ヴォーリス著) 編注(東京・北星堂) | |
| | | | | 8 | 25 | 68 | 「史的中江藤樹」(謄写版刷り) | |
| 1960 | | 35 | 1 | 19 | | | | 日米安全保障条約改訂(1.19) |
| 1962 | | 37 | 5 | 29 | 70 | | 「桜美林物語」初版本(桜美林学園) | |

| 西暦 | 和暦 | 月 | 日 | 歳 | 清水安三先生記録 | 関係書誌 | 一般社会 | |
|------|----|----|----|----|----------|--|-------------------------------|---------------|
| 1966 | | 41 | 1 | 25 | 74 | 桜美林大学文学部（英文科、中文科）設立認可 学長清水安三 | | 文化大革命始まる（6.8） |
| 1967 | | 42 | 4 | 10 | 75 | | 「中江藤樹」（東京・東出版） | |
| 1968 | | 43 | 3 | 15 | 76 | 大学経済学部（経済学科）設立認可 | | |
| | | | 3 | 28 | | 桜美林幼稚園設立 園長清水安三 | | |
| | | | 6 | 10 | 77 | 米国オペリン大学より名誉博士号授与 | | |
| 1970 | | 45 | 8 | | 79 | アジア平信徒会出席のため韓国訪問、崇貞学園の卒業生と再会（死刑の韓国青年救済が明るみに） | | |
| 1971 | | 46 | 5 | 29 | | | 「桜美林物語」改訂版 | |
| 1972 | | 47 | 4 | 1 | 80 | 経済学部にも商学科を設置 | | 日中国交正常化（9.29） |
| 1975 | | 50 | 5 | 2 | 83 | 同志社大学より名誉神学博士号授与 | | |
| | | | 6 | 2 | 84 | | 「北京清たん」（東京・教育出版社） | |
| 1976 | | 51 | 4 | 10 | | | 「周再陽先生の生涯」編集（前橋・鶴千会） | 周恩来没（1.8） |
| | | | 8 | 20 | 85 | 桜美林高等学校野球部が夏の甲子園大会に優勝 | | 毛沢東没（9.9） |
| 1977 | | 52 | 1 | | | | 「昭和への証言」（歴史と人物・中央公論社昭和52年1月号） | |
| | | | 7 | 25 | 86 | | 「石ころの生涯」初版本（キリスト新聞社） | |
| 1978 | | 53 | 2 | 12 | | 長男 泰 心不全のためロンドンで召天（56才） | | |
| | | | 10 | 7 | 87 | 財団法人善行会より金賞受賞 | | |
| 1979 | | 54 | 11 | 5 | 88 | キリスト教文化協会よりキリスト功労賞受賞 | | 中米国交正常化（1.1） |
| 1980 | | 55 | 3 | 25 | | | 「桜美林物語」再改訂版（桜美林学園） | |
| 1981 | | 56 | 7 | 20 | 90 | | 「石ころの生涯」改訂版（キリスト新聞社） | |
| 1985 | | 60 | 10 | 31 | 94 | 紺綬褒章受章 | | |
| | | | 12 | 11 | | 桜美林学園総長 | | |
| 1988 | | 63 | 1 | 17 | 96 | 午後8時20分急性心不全のため召天（96才7ヶ月17日） | | |
| | | | 1 | 30 | | 桜美林学園葬 | | |

「清水安三の思想と教育実践」より